

加齢研ニュース

令和 4 年 12 月 1 日
東北大学加齢医学研究所
研究会同窓会発行

【所長室便り】

川 島 隆 太

加齢研所長第三期目は新型コロナ禍の影響を
もろに受け、もやっとしたまま終わってしま
いそうです。新型コロナ禍の影響を受けてか、若
手研究者や院生たちも何となく元気がないこと
を肌で感じます。たとえ研究者同士であつとし
ても、他者との直接交流が強く制限され、リモ
ートの活用を余儀なくされてきたことが大きな原
因だと思います。

片平本部で行われる御前会議（部局長連絡会
議）もリモートが続きました。新型コロナ禍以
前から、ほとんど情報伝達のための長時間の会議
で、私は修行の時間と割り切っていました。それ
がリモートとなり移動の必要もなく、苦行
だったものが非常に楽になりました。ただ他部
局長や大学執行部と立ち話等をするこもなくな
り、会議では表立って出てこないような「情
報」が入ってくるこもほとんどなくなつてし
まいました。執行部との連帯感を感じるこも
なくなりました。間違いなくリモートは人間関

係を希薄化させます。同会議は、現在は対面と
リモートのハイブリッドで開催されています
が、私を含め多くの部局長はリモートのまま
です。楽で便利、低きに流れた習慣は、簡単
に戻すものではありません。

新型コロナとの間合いの取り方は非常に難
しいままなのですが、この夏からは、所内の会
議も対面を基軸に変更しました。加齢研は小
さな所帯ですから、対面コミュニケーションを
活発にして分野間の横のつながりを強化し、
それを研究所の強みにしていかななくては
いけません。私は下戸かつ（誰も認めてくれ
ませんが）人見知りなのでこれまで必然性
を全く感じていなかったのですが、あとは、
所謂、飲みコミュニケーション、国分町
会議が復活できれば、若手や院生も元
気になるに違いないと思うようになって
います。

そうは言っても、組織がバッシングされる
ことを恐れて、来年も新年会の開催に GO
サインは出せないに違いありません。当然
ですが、新型コロナに対する「感性」は、
人それぞれ大きく異なっています。トッ
プダウンで考えを押し

加齢研ニュース 第 78 号 目次

所長室便り（川島 隆太）	1
分野紹介（認知行動脳科学研究分野）	3
随 想（山家 智之）	4
研究員会便り（宇井 彩子）	8
所内人事消息	10
研究会同窓会広報（山家 智之）	12
編集後記	13

付けるべきではない事柄と考えています。かじ取りが難しいまま、結局は積極的な手を打てずにぐずぐずしている間に所長の任期が終わってしまいそうです。

助教の先生方との懇談を通して、彼らの士気が今一つあがらない大きな原因は、任期の短さにもあることが見えてきました。文科省の研究者の流動性を高め研究力を上げるとの方針に従って、本学でも常勤教員の任期制が押し進められてきました。任期制教員割合が運営費交付金の分配に直接影響するという兵糧攻めに屈し、加齢研でも承継枠（いわゆる座布団付き）の助教の任期は5年、再任は2年1回のみ、最長計7年となっていました。

ちなみに研究者の流動性を高めることが研究力向上につながるというロジックは未だに私の頭では理解できていません。現に、現在は、若手研究者の任期が短いために腰を落ち着けて研究をすることができないことが大問題で、テニユア化を進めるべきだと、正反対のことを文科省は言い出しました。どの口が言うか！ とあきれてしまいます。

文科省が手のひら返しをしたタイミングと重なってしまったことは痛恨の極みなのですが、助教の先生方の意見を取り入れ、まずは承継枠内の先生方に関して、任期5年、再任も5年、回数制限なし、と変更しました。基礎系分野に関しては、主任教授の退職時に閉鎖する方針は堅持していきますので、運用上は教授の退職にあわせて任期更新はしないことになります。この任期改革をきっかけとして、本研究所から、世界をリードする若手研究者がたくさん輩出するようになることを期待しています。

所長として積み残した大きな仕事は2点あります。1つめは、旧動物舎の建て替えです。重要な研究機器を守り安心して研究を継続できる

よう、免震の新実験研究棟を建築する計画です。残念ながら平成5年度の概算要求は財務省にあがりませんでした。ただこの計画は、今ある動物舎を解体せずリフォームする形のものでしたので、そのまま通してしまうと、あとあと面倒になることは、本部とも共有しており、大きな痛手にはなりません。

本部には大学債を起債して建築して欲しい旨を伝えてあり、GOサインはもらっています。ここから具体的な建築計画、それと並行して建築費用の返済計画を立てていくことになります。加齢研の今後数十年の未来を担う大事業となりますので、来春発足する新執行部が加齢研の次の時代を担う若手教授、准教授らと一緒に方針を決めるべきと考えています。私の仕事は、彼らがいつでも走り出せるよう、線路を敷くところまでと思っており、線路はほぼ完成させました。あとはエールをおくるのみです。

もう一つは以前も所長室便りに書きましたが、加齢研2025問題への対応です。あと3年で加齢研教授陣の約半数が入れ替わります。これからの加齢研がどの方向を向いて、どうやって世界をけん引していくのか。大胆な人事で切り込むことができる大きな機会がやってきます。この大変革も新所長の元で、若手教授、准教授らが行うべきと考えており、私の執行部では議論を深めることはあえてしませんでした。ここでも、老兵はエールをおくるのみです。

さて、所長室便りを執筆するのも（ようやく）これで最後になります。所長室便りには2014年6月1日付けの加齢研ニュース第61号から拙文を寄稿し始めました。読み返してみると、冒頭、「2015年4月1日に加齢医学研究所長を拝命いたしました。」から始まっていました。いきなり年が間違っています。何とも不安な新所長さんの門出です。活字になる前に誰か間違いに気づけよ！ と、責任転嫁したくなります。

「本学で2番目に古い附置研のかじ取りを、滅私奉公を座右の銘として務めていく所存です。」「加齢研ではほぼ純粹培養されて育った新所長として、現職員、諸先輩方の研究所に対する想いは肌で感じており、この想いを途切れることなく未来に繋いでいくために努力を続けたいと思っています。」との決意も書いてありました。いや、何とも青い。恥ずかしくなります。でも、約束は果たせたかなと、大甘の自己採点をして脱稿したいと思います。

次年度から、新執行部の元、本研究所が大きく発展することを心から祈念しています。

【分野紹介】

認知行動脳科学分野

認知行動脳科学分野の細田千尋と申します。本分野は、2022年6月に設置いただきました。そこから遡ること2ヶ月前、2022年4月に東北大学大学院情報科学研究科に着任いたしました。人生も半ばを超えている身でお恥ずかししながら、生活の拠点が大きく変わったのが、人生で初めてのことでした。しかも単身（小さな3つコブ付き）です。不安がなかったといえば大嘘になりますが、ヒトの脳イメージング研究をおこなっていた私にとっては、川島隆太所長や瀧先生がいらっしゃる東北の地で研究を展開する機会をいただけたことに、ひたすら夢を持って仙台にやっけてまいりました。そして念願叶って、加齢研で研究にとりくむ機会を与えていただけましたこと、大変ありがたく思っております。気を引き締めて研究に邁進する所存です。

当分野では、ヒトを対象とし、非認知能力（遂行機能/GRIT、レジリエンスなど）が、どのように発達し（発達研究）、どのような能力個人差を生み（成人）、残存機能（高齢者）にどのような影響を与えていくのか、という加齢プロ

セスにおける個人差を、ニューロダイバーシティの視点から捉えていくことを目標としています。また、さまざまな能力の個人差を生み出す神経基盤の解明に加え、脳可塑性を誘導する個別最適された well-being な学習法の開発を目指しています。

自己紹介を兼ねて、上記のような研究を志すに至るまでの道のご紹介させていただきたく存じます。私の関心は、大学学部時代に、文学部英文科で第二言語獲得を調べることからスタートしました。当時、バイリンガルの人が脳卒中後に、母語が話せなくなり、第二言語のみが使える状態になった、という講義を受けて衝撃を受けたことを今でもよく覚えております。なぜ？ と。しかも気になって調べてみると、いくつかそのような事例があり、母語が話せるのに、第二言語が話せなくなる、など逆パターンも存在することがわかりました。文学部所属で、当時は今のように脳科学研究について、学部生にその面白さを文理問わずに教えるような講義はなく、正直なところ「脳」との接点はほぼ皆無でした。ところが、ちょうどその時代、脳トレが世界的なブームを巻き起こしていました。それも大きなきっかけとなり、第二言語（英語）の獲得も、脳が重要なのだろう、もしかしたら脳を研究したら英語ができるようになるかもしれない、というかなり短絡的な発想から、研究をスタートしました。そうは言っても、私の大学の英文科でできる研究はしれており、文献研究です。ただしそれをきっかけに、脳を実際に研究できる場所をと思い、大学院で脳科学の道を選びました。そこで、出会ったのが研究用のMRIです。

健常の人の脳を見ることが出来る装置、というのは、当時の私にとっては驚くべきものでした。この出会いをきっかけに、念願だった、英

語と脳の関係についての研究に着手しました。まずは、英語が得意な人の脳の特徴ってあるのだろうか？ もしあるのだとしたら、その特徴は、生得的なものなのか、獲得したものなのか？ という問いからスタートをしました。ちょうどその研究を始めた頃の2004年には、ロンドンのタクシードライバーの脳の構造的特徴の研究が発表され、さらに、2006年には、ジャグリング未経験者がジャグリングができるようになると脳構造が変化するという研究が発表されました。まさにこの手法を英語学習に当てはめてみることにしたのです。まず英語が得意な人を100名以上集めて、脳構造と英語能力の相関を明らかにしました。その上で、英語が極端にできない人に英語のトレーニングを4ヶ月行くと脳にどんな変化が起こるのか、をMRIを使って検証しました。この研究成果をまとめることができたのですが（Hosoda et al, 2013, J. Neuroscience）、実はこの研究をおこなったことが、私の研究人生をかけてみたい、非認知能力個人差とニューロダイバーシティという研究テーマにつながりました。

英語の学習実験について、モチベーションが高い人ばかりを集めたにも関わらず、大半の人が途中でドロップアウトしたのです。そして、この学習からのドロップアウト現象は、英語のみならず、ドメインが全く異なる、運動学習や、短期的な認知タスクでも起こることを実証しました。つまり、この目的に対する行動の継続（遂行機能/GRIT）は、ドメインジェネラルで、個人の固有値として存在しうる可能性を示したことになります。その上で、この遂行機能/GRITの個人差が、脳構造の個人差から説明できる可能性について明らかにしました。さらに、個別最適な学習を提供することが、ドロップアウト率を下げ、脳構造にも可塑的な変化をもたらすことを明らかにしました（Hosoda et

al. Comm. Biology, 2021）。

どんな能力の獲得においても、目標に向かって行動を継続することが重要になってきます。そのため、私たちは、遂行機能/GRITが生涯をかけてどのように発達し低下していくのか、そしてそれがどのようにヒトの能力拡張や、well-beingに関連するのか、を明らかにしていきたいと考えています。もちろん、能力の獲得は、目標とするものに対する潜在的な向き不向きといった初期値によっても左右されるものでしょう。そのため、ニューロダイバーシティの観点から、英語に限らず様々な能力（数学、空間認知、読解など）の伸びの個人差なども明らかにできれば良いと考えます。それらの個人差情報を組み合わせることで、どんな人が、どのような方法を用いれば、脳の可塑性と能力獲得を促進できるのか、さらに、目標達成をすることでwell-beingを得ることができるのか？ について明らかにしていきたいと考えています。

今後、加齢研の一員として研究を発展させていくことができるよう、尽力してまいりたいと思っております。何卒よろしくお願い申し上げます。

（文責：細田 千尋）

【随想】

田中元直先生を偲んで

心臓病電子医学
山家智之

医学にあるものは「発見」であって「発明」ではない。と、習ってきました。医学とは、そもそも人体を精密に観察し、診断し、治療をすることであって、機械の開発者が「ものを造る」方法を「発明」するのは、次元が違う。と、教えられてきたし、医者たるもの、金儲けとか、

会社を作るなどと考える。ことは、はしたないことだ。と、言われてきましたが、自分の研修医時代でも思わず「んなこと言ったって・・・CTの発明はノーベル賞じゃないですか」と、おっかないオーベンに、口答えしたのを覚えています。

(いや～生意気な研修医だなあ～)

最近だと、東北大の誇る田中耕一博士の、ソフトレーザー質量分析も、京大のiPSも、そうですね。科学が進んで新しい方法論が発明されれば、もちろん、助かる患者さんは増えるわけです。

CTの発明は、確かにノーベル賞に値する「発明」です。

と、言うのは、医学部学生を悩ませる神経学的所見。身体学的所見。反射を見ても、出たり出なかったり…とても、再現性があるとは思えません。

しかも、あの所見だけで、脳にある病変を「推定」して、「開頭」して、「脳の手術」…なんて？

もし、診断が外れてたら…どうするの???

もちろん、戦争の時代には、頭を銃で撃たれた患者を何とかしなくてはならないし、それなりに知見もあったとは思いますが、CTがない時代の脳外科手術なんて、正直…、考えただけでも、ぞっとします。

CTは、確かにノーベル賞に値します。

しかし

ちょっと待ってほしい。

抗酸菌病研究所では、CTより早く、「人体の画像診断・映像診断」の「発明」がなされていました。

今は、ネットで簡単に、世界で一番古い論文が検索できますから、心臓、と、超音波、と、

トモグラフィで検索すると、

なんと、世界で一番古い「心臓超音波断層検査」は、この抗酸菌病研究所の内科のME研究室の、論文であることがわかります。

抗酸菌病。と、言うのは、「抗酸菌」を原因とする病のことで、代表的には、「結核」のことですね。

結核の診断のためには、レントゲンもツベルクリンもありますが、一には、「聴診」ですが、そこには、なんに客観性もありません。

教授が「結核」と診断したから「結核」では話になりません。

当時からすでに「医+工連携」の研究は、進められており、「呼吸音」の「電氣的描写」の研究がすでに昭和の天皇陛下の御代の開始と同時くらいに行われていました。

まあ、ざっと百年前ですね。

「呼吸音+心音」を、電氣的に描写できたところから、音波から「超音波」へ進み、「超音波診断法」から、世界最初の「心臓超音波断層診断法」の発明に結び付くわけです。

田中元直先生の発明。と、言いたいところですが、昭和初期から今日までの百年を超える「音波」「超音波」の研究の蓄積によって立つところなので、東北大学の、医学部と工学部の長年の共同研究のビッグプロジェクト研究の、成果の一つ。というところが実際なのかもしれません。

が

CTより、ずいぶん早いです。

じゃ、

CTより、先に、ノーベル賞もらったって良かったんじゃない？

ちょっと、本気でそう思っています。

ある意味では、「超音波心臓断層法」の画像は、CTより有効だったりもします。

聴診，脈診，よく見えないカテーテルのレントゲン検査。

…そんな情報しかなくて「心臓の手術」が行われていたのです。

もし診断が外れていたらどうするの??

考えただけでぞっとします。

抗酸菌病研究所に，何でノーベル賞が来ないの？

CTより早く，英語の論文だって書いているのに…

半分くらい本気で思っています。

いや～離れ小島の黄色いサルが書いた論文なんて，人種差別であいてにされないのかしらん？

そんなことも考えました。

プロジェクトチームを主導した，抗酸菌病研究所内科ME部門の田中元直助手は，登米の出身と聞いていましたが，実は，昭和七年に東京でお生まれと後で伺いました。

なんと！ 一月一日のお生まれ。元旦にぴったり「直」でお生まれで，お名前が「元直」先生というのは，なんか出来すぎ？ な，ような，気も致しますし，持って生まれた，強運？ を，表すお名前かな？ と，いう感じも致します。

運が良いと言えば，生理薬理に強い東北帝大も本川総長の脳波研究の時代に入り，田中先生はMEや機械には前々から興味は持ったとはお伺いしていましたが，大学院生の時代から「心音の電気描写 Phonocardiographic studies in congenital heart diseases with special reference to the frequency analysis of heart sounds and murmurs by special phonocardiography. Sci. Rep. Inst. Tohoku Univ.-C,11: 214, 1962」のテーマで学位を取得しており，東北大に伝統のある「音波・超音波研究」に入る「強運」も，お持ちだったのかも知れません。

そのまま文部教官助手。ということで東北大のME研究を主導していくことになりませんが，ホントかウソか判りませんが，内科の大学院生四人で「ジャンケン」して助手を決めたという逸話も残っています。昔，耳鼻科の河本教授も，入局した途端，「ジャンケン」させられて，それも「負けて??」泣く泣く，一番給料が安い大学の助手になったとの話を自分でさしていましたが，ホノボノとした時代もありました。

1963年には，世界で最初の「超音波心臓断層法」の論文が出ていますから，まさしく東北大学の医学部・工学部挙げた大きなプロジェクトチームの中心にいらしたのですね。これも強運のお一つかと思います。

体調を崩したとはうかがっておりましたが，田中元直先生は2022年5月14日に残念ながらご逝去されました。

ここに哀悼の意を表し，謹んでご報告申し上げます。

田中先生は1932年にお生まれになり，東北大学医学部を1958年に卒業し，心音図に関する研究によって医学博士号を所得され1963年東北大学文部教官助手（東北大学抗酸菌病研究所），1965年東北大学医学部講師となりました。

1964年の断層心エコー図の創始，1969年変調方式超音波ドプラ法の開発など学際領域の研究の展開は，先進医療技術の発展のために積極的な先端技術の導入研究を行うことの必要性和重要性とを世間に広く知らしめるところとなり，1979年3月同研究所に電子医学研究部門が設置され，同10月推されて教授として同部門を担任することになりました。

私ども大学院生に関してはとにかく厳しい指導で昔から知られており，大学院も，4年生に

なって博士論文を持っていくと、「…ん～…こっからここまで、ぜ～～んぶ、ダメ。ここ、根拠がない。ここ、論理を飛ばしすぎ…あれも駄目ここも駄目…全部書き直して…等等」いったいどこまで「指導が続く」ことやら…と、お昼頃に始めたのに、三時間たっても四時間たっても10時間たっても終わりません…」

「ん～…明日になっちゃうかあ…じゃ、全部直してきて！ 明日またやろう！」

「……」

とても口に出せないほどのネガティブな思いがなかったわけではありませんが、教授の方になって考えてみれば、教授の方でも、相当果敢に根性のいる指導で、確かに、博士論文は良くなった気は、するのです。

おかげさまで、完成して投稿し、学術賞もいただけることになりました。

マレーシアから来た留学生のスタント君曰く。

「工学部の博士指導が日本で一番厳しいのは大槻先生」

「医学系の博士論文が日本で一番厳しいのは田中先生」…って有名だよ？

とのお話で

聞いてないよ？？～～？？～～？？

と

思ったのは懐かしい思い出ですが

厳しい指導の甲斐もあり僕らの周りだけで10人くらいは「教授」として巣立っていきました。

このような医工連携研究の発展は、後に東北大学に日本初、そして現在でも唯一の「大学院医工学研究科」が設置される経緯となりました。

1993年4月には、研究所の改組にともない、

東北大学加齢医学研究所 臓器病態研究部門 病態計測制御分野と名称を変更されましたが、田中先生は15年にわたり部門の基礎の確立と発展に寄与されました。

早くも1987年には東京工業大学精密工学研究所における医用計測部門の新設に尽力され、新設と同時に同部門を兼任し1994年3月までの5年間、東工大における医用生体計測学に関する研究の推進に貢献しました。

1994年3月退官と共に東北大学名誉教授となり、東北厚生年金病院（現 東北医科薬科大学病院）の病院長に就任されました。2000年に結核予防会宮城県支部長、2013年には公益財団法人宮城県結核予防会理事長に就任され、胸部疾患の診断と治療に尽力されました。

その業績に対し、1962年に総合医学賞、1964年に東北医学会賞（銀賞）、1972年に東北医学会賞（金賞）、1988年に社団法人日本音響学会論文賞、1990年に社団法人可視化情報学会論文賞、1991年に可視化情報学会功労賞および日本超音波医学論文賞など多数の学会論文賞を受賞するなど、多くの顕彰を受けました。

病院長としての社会的な大役を2000年に終えた際にも「これでやっと研究に集中できる」と、衰えることのない研究意欲を示され、2020年には、日本超音波医学会論文賞第15回伊東賞を御年88歳にて受賞されました。

日本超音波医学会では評議員、理事、監事、編集委員会委員長、1982年に仙台で開催された第41回日本超音波医学会学術集会大会長の要職を務め、2000年には社団法人日本超音波医学会第2回特別学会賞を受賞、日本心臓病学会理事、評議員、日本循環器学会評議員、日本ME学会評議員等数多くの関連学会役員に就かれ、1978年に日本心臓病学会大会長、1994年には超音波組織性状診断に関わる国際シンポジウム“International Symposium on Ultrasonic Tissue Characterization”を仙台にて主催し、学術

の発展に貢献されてきました。

田中先生は従来の心音図から発想を得て超音波の心臓病学への応用を展開した国際的な先駆者の一人で、心臓超音波断層法の創始、変調方式超音波ドプラ法による心臓内血流計測の実証、超音波顕微鏡の開発等、超音波医工学の基礎を確立し、多くの発明も成し遂げられました。例えば

- ①断層心エコー図法の創始：1964年。世界で初めて超音波によって心臓の任意の断面画像を描写する方法は世界の超音波医学の歴史上でも非常に高く評価される業績です。
- ②超音波ドプラ法の開発：1969年変調方式超音波ドプラ法の開発により、心臓内血流計測が可能であることを世界に先駆けて実証し、心機能を評価する手法の実用化を行いました。
- ③超音波顕微鏡の開発と実用化：医学・生物学用の超音波顕微鏡の開発と実用化を世界に先駆けて行い、ミクロな生体組織の物性計測による組織変化の計測と解明に尽力し、新しい学術研究領域を拓きました。
- ④超音波による体腔内走査法：超音波による気管内走査法、直腸内走査法、食道内走査法など体腔内走査法を考案して特に癌等の腫瘍診断に新方面を拓きました。
- ⑤Echo-dynamographyによる心臓内血流評価：超音波ビーム方向の血流速度しか計測できないというドプラ法の欠点を補うため、カラードプラ画像で得られた速度情報に流体力学の諸法則を応用し、3次元空間における2次元血流ベクトルを描出するEcho-dynamographyを開発し、心臓病の病態を壁運動だけではなく血流評価からも解明しようとする新手法の発展に貢献しました。

このように田中元直先生は世界の超音波医学の歴史にも大きな足跡を残されました。現在も、日本で唯一の「大学院医工学研究科」では、「世界最強?」とも呼ばれる質量ともに大きく拡充したチームが超音波研究の大きなダイナモを回し続けています。

【研究員会便り】

研究員会委員長 宇井 彩子

令和4年1月から委員長をさせて頂いております。分子腫瘍学研究分野の宇井彩子です。研究員会は、加齢研の若手研究者を中心として、研究所内外の人的交流を促し、研究を活発化する環境づくりや活動や催しを行っています。ご意見ご要望等ございましたら、いつでもお気軽に研究員会にお声がけ頂ければと存じます。引き続き、ご協力を賜りますようお願い致します。

研究員会活動内容 (R4.6～R4.11 まで)

1. 令和4年度研究所若手アンサンブルプロジェクトについて

部局間の共同研究を支援する「2022年度東北大学若手研究者アンサンブルグラント」(Ensemble Grants for Early Career Researchers 2022)の公募が行われました。本年度は、前年度の1.7倍の応募件数があり、全38件の応募のうち17件が採択となりました。加齢医学研究所からは10件の応募があり、3件の課題が採択されました。この助成金では、採択課題をランダム選択(抽選)により決定しますので、ある意味では公平な配分となっていますが、今回、加齢研からの申請課題は、期待される抽選の確率よりも低い採択率となっていました。今回、運悪く不採択となった申請についても、次年度の応募を検討していただければ幸いです。応募件数は年度によって波がありますが、総じて採択率の高い助成金であることは間違いな

ので、来年度以降も積極的な応募をお願いしたいです。また、2022年11月22日には、ハイブリッド開催にて、第9回東北大学若手アンサンブルワークショップが行われました。課題採択者の研究発表や若手研究者の口頭発表、ポスター発表が行われ、優秀な発表については、表彰が行われました。

令和4年度研究所若手アンサンブルプロジェクトWG加齢研委員 久保 純

アンサンブルプロジェクト

HP: <http://web.tohoku.ac.jp/aric/>

2. 加齢研新人研修会

日時：令和4年6月8日（水）午後1時
15分から Web で開催

3. 令和2年度加齢研若手共同研究促進助成金成果報告会について

日時：令和4年6月8日（水）午後1時15
分から Web で開催

令和2年度加齢研若手共同研究促進助成金採択者による成果報告会を午後4時～5時15分まで行いました。

4. 研究員会総会（新型コロナウイルス感染症拡大防止の為、メール開催）

メール審議により承認されました。

日時：令和4年6月8日（水）加齢研新人研修会終了後、午後5時30分メール送信、

6月9日（木）正午 意見締切

1. 議長選出 宇井彩子研究員会委員長に議長をお願いいたしました。

2. 出席者・委任状の確認

3. 令和3年度度の決算報告

4. 令和4年予算（案）

5. その他

例年、総会後に開催しております新入会員歓

迎会は新型コロナウイルス拡大防止の為に中止になりました。

5. 第158回集談会（R4.7.15）での研究員会第41回発表コンテスト

新型コロナウイルス感染症拡大防止の為、令和4年7月15日（金）午後1時からハイブリッドで開催されました第158回集談会での第41回研究員会発表コンテストの受賞者は第1位は谷春菜先生（モドミクス医学分野）、第2位は野田祐資先生（心臓病電子医学分野）に決まりました。おめでとうございます。

表彰式は新型コロナウイルスの感染状況を見ながら行う予定です。

6. 第7回加齢医学研究所リトリート

新型コロナウイルス感染症対応から、今年度のリトリートは中止しました。

7. 令和4年度加齢研若手共同研究促進助成金について

本研究費は、加齢医学研究所研究員会に所属する研究者が研究責任者となり、2分野以上の分野間で密接な連携のもと行われる共同研究を支援するものです。選考は申請書をもとに加齢医学研究所研究員会から選抜された審査員による書面審査を行い、教授会において採択研究が決定されます。

8. 令和4年度加齢研交流セミナー

第1回加齢研交流セミナー

新型コロナウイルス感染症拡大防止の為、Web開催

日時：令和4年6月3日（金）16時から
17時10分 web形式（zoom）にて行いました。

講師：生体防御学分野 小笠原康悦

応用脳科学研究分野 榊 浩平

連絡先：加齢医学研究所・研究員会事務局
齋藤 内線：8576

第2回加齢研交流セミナー

日 時：令和4年10月6日（木）16時から
17時10分

場 所：実験研究棟7階セミナー室1（web
併用開催）

講 師：分子腫瘍学研究分野 陳 冠
人間脳科学研究分野 杉浦元亮

連絡先：加齢医学研究所・研究員会事務局
齋藤 内線：8576

9. 加齢研研究員会セミナー

http://www.idac.tohoku.ac.jp/site_ja/news-events/

<http://www.idac.tohoku.ac.jp/site/news-events/>

日 時：令和4年7月19日（火）午後3時
～（対面で開催）

場 所：加齢医学研究所 スマート・エイジ
ング棟セミナー室2階

講 師：ロレンツォピア，准教授

所 属：トリノ大学心理学科（イタリア）

演 題：身体的な自己意識の根源について

担 当：ダリラ ブリン（所属 スマートエ
イジング学際重点研究センター・内
線 8585）

日 時：令和4年11月1日（火）午後4時
～午後5時（対面で開催）

場 所：加齢研実験研究棟7階セミナー室1

講 師：趙 民知

所 属：がん研究会 がん研究所 実験病理部

演 題：がんの悪性形質に寄与する染色体
異数体化の変動

担 当：家村顕自（所属：分子腫瘍学研究
分野・内線：8490）

10. 加齢研研究員会スポーツ大会について

スポーツ大会の開催について各分野にアン
ケートを取りました。

加齢研内の他分野との交流の場として活用で
きる可能性があり、今後検討していきます。

11. 研究員会副委員長の後任について

副委員長の遠藤章太先生（遺伝子導入研究分
野）が令和4年9月で退職いたしました。

選挙規定の第13条により後任の副委員長は
基礎加齢研究分野の白川龍太郎先生です。

任期は令和5年12月31日までです。

今後の予定

1. 第159回集談会（R5.2.10）での研究員会
第42回発表コンテスト

2. 第159回集談会終了後に行います研究員
会主催新年会 中止

3. 第3回加齢研交流セミナー

日 時：令和4年12月23日（金）16時か
ら17時10分

場 所：実験研究棟7階セミナー室1 開催
形式 未定

講 師：腫瘍生物学分野 吉野優樹

神経機能情報研究分野 久保 純

連絡先：加齢医学研究所・研究員会事務局
齋藤 内線：8576

第4回加齢研交流セミナー（日程未定）

【研究会同窓会広報】

庶務幹事 山 家 智 之

庶務報告

1. 研究会同窓会会員の確認（令和4年11月
現在）

会員数 2,157名

（所内在籍者212名，所外717名（過去5年
間の会費未納者は、239名で加齢研ニュースは
送付していません。）海外92名，退会者595
名，物故者330名，住所不明211名）

賛助会員 23 施設
 購読会員 17 件
 物故会員 (令和4年6月～令和4年11月までの間に事務局に連絡がありました。)
 一宮 道憲先生 令和3年12月4日 抗研病理
 廣瀬 正徳先生 令和3年12月9日 抗研外科
 田中 元直先生 令和4年5月14日 抗研内科 抗研電子医学
 新田 澄郎先生 令和4年6月9日 抗研外科

2. 第158回集談会

日時: 令和4年7月15日(金) 午後1時から
 ハイブリットで開催。

場所: 加齢医学研究所 スマート・エイジング研究棟 国際会議室

一般口演 10 題

3. 令和4年加齢医学研究所研究会同窓会総会, 懇親会(園遊会)

総会 集談会終了後, リモートで開催。

懇親会(園遊会) 中止

4. 加齢研セミナー(令和4年6月～令和4年11月の間に開催されました。)

日時: 令和4年6月14日(火) 午後3時30分～4時30分

場所: 加齢研実験研究棟7階 セミナー室(1)

講師: 中村 能久

所属: 加齢医学研究所生体代謝制御学分野
 /シンシナティ小児病院

演題: RNA ネットワークによる免疫代謝制御

担当: 遺伝子発現制御分野 本橋 ほづみ

日時: 令和4年9月1日(木) 午後3時～4時

場所: 臨床加齢医学研究分野 スマート・エ

イジング棟4階 セミナー室 ハイブリット開催

講師: 米田 哲也

所属: 熊本大学大学院生命科学研究部医療技術科学分野

演題: 医療利用のためのMRI位相画像情報の理解

担当: 臨床加齢医学研究分野 瀧 靖之

連絡先: 臨床加齢医学研究分野 館脇 康子

日時: 令和4年10月26日(水) 午後3時～4時

場所: 加齢医学研究所スマートエイジング棟6階セミナー室

講師: Professor. Jérôme DINET

所属: ロレーヌ大学 心理・神経科学研究所

演題: 没入型仮想現実(IVR)を用いた高齢者の身体活動の促進

担当: 応用脳科学研究分野 川島 隆太

連絡先: 認知健康科学研究分野 野内 類

5. 加齢研ニュース発行

77号 令和4年6月

78号 令和4年12月

今後の予定

1. 第159回集談会

日時: 令和4年2月10日(金) 午後1時から
 ハイブリット形式で開催の予定

場所: 加齢医学研究所 スマート・エイジング研究棟 国際会議室

第30回加齢医学研究所研究奨励賞, 一般口演

2. 第160回集談会

日時: 令和5年7月14日(金) 午後1時から
 開催形式 未定

場所: 加齢医学研究所 スマート・エイジング研究棟 国際会議室

一般口演

3. 令和5年度加齢医学研究所研究会同窓会総会、懇親会（園遊会）

日時：令和5年7月14日（金）

総会 集談会終了後 開催形式 未定

懇親会（園遊会） 未定

4. 加齢研セミナー

日時：令和4年12月22日（木）午後1時
30分～2時30分

場所：臨床加齢医学研究分野 スマート・エイジング棟4階 セミナー室 ハイブリット開催

講師：増谷 佳孝

所属：東北大学大学院医学系研究科 保健学専攻 画像情報学分野

演題：機械学習による拡散MRI

担当：臨床加齢医学研究分野 瀧 靖之

連絡先：臨床加齢医学研究分野 館脇 康子

5. 加齢研ニュース発行

79号 令和5年6月

80号 令和5年12月

[編集後記]

加齢研ニュース第78号をお届けいたします。お忙しい中、ご寄稿いただきました皆様に心より感謝申し上げます。川島先生の所長室便りも今回は最後ということで、大変寂しく感じます。川島所長は、強力なリーダーシップで数々の新機軸を打ち出され、そのおかげで加齢研の地位は、この困難な時期にもかかわらず大きく向上しました。加齢研の今後に向けてのメッセージを、心に刻みつけたいと思います。学会活動も次第に対面で開催されるようになり、直接会って雑談する中で様々なヒントが得られることが多く、対面コミュニケーションの重要性を再認識しています。長らく中断している加齢研の諸行事が再開される日が待たれます。

（田中耕三）